



川中島大合戦全

931



甲越戦争の原
 田と委
 越後春日山の
 城主上杉景虎入
 道といふ智仁勇
 兼備と義と重
 村上義清と助け
 武田信玄と鏖先
 室町將軍の命
 一度和義整ひ
 曲川の和睦や
 より再度双方怒気

甲越



川中島
 大合戦
 加賀吉板



と含み
信の謙
上洛の度
將軍家
へ拜謁
せんこと
なほひ立
武田

我帰国まを軍馬と止め下さ
れと申送られし
信玄委細承知せ
上洛の事
よとの返
谷の謙
信大
安堵
洛の用
急



の強敵あ
りて容易
一國と
あけ難
一免ふ角
武田へ使者
を以て信玄
の存意
を伺んと
使者を送り
云々の訳
て上京就

速に整
一國許の兵
少の守兵
を残り五
有餘の大軍



を俱いで登られ
 一が爰
 上杉
 の幕下
 太田三樂齋と
 いへる者あり
 田頃強気の性
 早景虎が留守
 條と責んと近
 兵と募り小田原へ

山本勘助廿
 利左エ門浅利
 式アツ輔オの勇
 士と従へ信玄自
 り三万余の大軍と



北條
 勢甚
 武田家へ助
 力を乞ふ信玄
 早く速小田原
 へ對て助勢を遣
 とてさき告あまよ
 左いかに上杉の
 持城信越の国
 鯨ヶ嶽の城と攻

本松
 佐
 野
 数
 馬
 不
 意
 敵
 僅
 の
 手
 勢
 を
 免
 数
 日
 防
 ぎ
 戦
 ひ



佐野の
西將討死し落城也



武田方々も此城攻ふに在り
全く勝利を得て甲府へ引揚り
誓ひて語を交古みりて我空居
討んと為せ此興の振まひ
難く國元こそ氣遣いとて將軍
へ暇をさへそくよ本國へ引取り
此時將軍義輝公より程の字を
謙信春日山へ帰着せしとて道
府へ使者を遣ひ罪を責むるに
より我縁者たる北條を攻る



軍馬と向
 罪其方あり
 答へり謙信
 憤り増き
 切き兵
 めゆ
 守
 万余人あり
 国への
 あり



謙信
 今心安
 軍一万余
 千余人を引
 卒一より又武田
 方左馬助
 太郎日道遙
 軒と
 二千余
 人妻女山
 善光寺への
 通路と
 是れハ越
 後勢も兵糧の
 不
 妻女山へ用者
 更ふ
 と伺ひ



信自り能とまひ
 日夜酒宴と催
 少くも是と苦
 あもせどれを信玄
 少くも存意違ひ
 れ心中不惑ひと生
 ト斯のしく兵糧の
 途と絶れ八方より敵

又さして甲府と
 討ん計策ありん
 もあれは由断のあらぬ
 強敵也大事と取る
 はあつと其夜附道
 を経て海津の城へ
 入あける徒と妻女山
 より善光寺への通
 路もやち成
 ければ謙信



信
 日
 我
 と
 兵
 引
 付
 別
 兵

心得
 掛念のき体甚と以て
 我思ふも謙信



謙信の謀
畧とくあ
き
と
信玄大
よ
ま
あ
ひ



夏酒宴と止め打とれ本陣
ととめ諸陣あつまりえつて見
ふけり武田方より兼て多くの
用者を入置こればおんを遂一
注進あるふを信玄向より左こそ
あん我推量一達とぞ一と先

軍師
真田
山本
の西
士と
これ
我思
ふ一
因み
謙信
れが
策



画餅とありて勇気
 おとろへしこそ屈竟
 り此山と討るが必
 定越後勢ハ敗軍は
 言と疾む左とれ
 宵深更に至り妻女山へ
 討と掛んと思ふあり其
 とも異見を聞くと仰
 山本勘介進出公の
 思台至極せり今夜
 夜討と仕掛んと
 あり六万人



と以て
 夜討と
 川中島へ
 廻り越
 後勢の退
 口をさへ前後より
 めさば越後せい何奈一勇
 と討敗んて心易し
 申上る信玄再
 び真田の存意
 何奈よく向ふ真田進出

甲越



こころの味方
 あやうし思ふ夜
 まで足るべし待
 うそ肝要あ
 と山本
 敵より真
 田の言ふ事
 ハ敵と恐れ大事
 とていふ事と見
 り何程智謀
 勝れし謙信
 ありてむすむ

小勢
 討つ小勢
 受る備

川中島

九



山本
 の言
 一利あり
 まる似
 若
 謙信夜討と悟
 りあが我兵と出抜
 川中島へか出さ

心付
 疾
 々決定
 山本
 真田
 の軍
 法危
 と思



終つて其の
 小次 信ハ表
 信ハ表 由ハ断
 由ハ断 体ハ見
 体ハ見 陣外
 陣外 見廻り
 見廻り 所ハ海
 所ハ海 津の城
 津の城 兵糧を焚く
 兵糧を焚く 時郊の遠



ある心付夜討
 と悟り俄に兵糧の
 用意を命じ妻女
 山ゆき篝を焚き
 捨人数の居る体
 見せり子子の刺妻
 女山を引松川中島へを
 操出さしける武甲が
 と妻を殺さんゆへ此
 更み知るよりありける
 九月十日曉霧と
 折る人馬の音懸か
 るハ信玄怪しとあひ浦の





早くも馬と乗る
 信玄は斯と言上り
 速く指揮
 と傳へいざや未
 れと待所を越
 後勢八柿等
 泉守ととめ
 五名の大將士卒
 を伴ひ車輪の
 攻立ける山本勘介ハ
 我軍法の違ひあり
 真田へ對し面首あり
 八方ありてつひ討死



ろびは越後勢是は
 武田勢と斬伏せ
 と戦ひける謙信
 みく信玄を見何
 信玄の軍配を以て
 川と渡りて遁ん
 謙信追うけれ
 打合信玄手疵
 のれり明る日死
 一ふ武田方あり
 もめとして士大
 四千六百人餘り
 將軍義孝公

ヨ 戌

十二



西家の争ひ心痛むを以て
御扱ひと以て永禄七年
子の七月和睦をひけり
上杉武
田の

争ひ
此戦
争う五度
即ち十七両将
手合せ一程の
戦あり日本三戦
の内二戦より関ヶ
原より一日老
勝負を分り古今
あり

明治十八年八月廿日御届
日本橋区吉川町五番地
編輯出版兼堤吉兵衛

定價八錢

